

逆井孝仁先生を偲んで

立命館大学 桂島宣弘

私にとって、逆井孝仁先生といえば、今は亡き二人の方々の思い出と分かちがたく結びついている。

一人は、私の恩師衣笠安喜先生だ（二〇〇一年十二月三十一日逝去）。立命館大学に、あるいは立命館大学の思想史学に、逆井先生そして日本経済思想史研究会をご紹介くださったのは、衣笠先生である。一九九〇年に日本経済思想史研究会の大会が甲南大学で開催されるとのことで、立命館大学の関係者も一名報告をすることになったのが機縁である（見城悌治氏が報告、ただし私は所用でこの会には出席できなかった）。後に衣笠先生にお聞きしたところでは、逆井先生が同志社大学に奉職中に、衣笠先生とは奈良本辰也先生の研究会などで知り合われた由。そして、一九九一年には、立命館大学で日本経済思想史研究会の大会が開かれ、私も報告することとなった。このときに逆井先生をはじめ、杉原四郎先生、住谷一彦先生などマルクス・ヴェーバー研究を代表する蒼々たる面々と初めてお会いした。実は、立命館大学の思想史学もマルクス主義的思想史学を継承している潮流と見なされていたのだが、正直それは八〇年代までのことで、当時目に見えて形骸化しつつあった。また、この頃大阪大学にいらっしゃった子安宣邦先生が斬新な視点で思想史学を刷新しつつあり、われわれも大きく方向転換を迫られていた矢先の、逆井先生、そして日本経済思想史研究会との出会いであった。

私はこの出会いに、大きな衝撃を受けた。マルクス主義経済学への確信にいささかも揺るぎがなく、ヴェーバーも交えつつ世界史的視点から理路整然と展開される逆井先生などのお話には、私は、やはりマルクス主義の影響を受けてきた者として、大変勇気づけられる思いであった。ソ連・東欧の崩壊を受けて、次の世代が批判的知性を後退させつつあることに対する深い憂慮と、マルクス主義の再生に向けての熱い思いが、そこにあったように感じた。このことは、その後研究会で逆井先生にお会いする度に常に感じていたことである。

もう一人は清水教好氏だ（二〇〇七年二月二十六日逝去）。立命館大学でたぶん彼ほど逆井先生の影響を受け、かわいがられた者はいないだろう。逆井先生が立命館大学大学院の集中講義にいらしたのが一九九二年、彼はその授業の院生代表を務めたのであったが、逆井先生の世界史的かつ理論的思想史像に大変影響された模様で、逆井先生のお話ぶりや手ぶりまで真似て、人前でよく逆井先生のお話をしていた。私などはそれを不謹慎であると彼を叱ったものだったが、よく考えてみると彼もまた急速に細かい実証主義に閉塞していったかにみえた歴史学・思想史学に苛立っていた一人であり、逆井先生の理論的思考に大きな影響を受けていたのだ。その後、彼は病で倒れる一九九七年まで、日本経済思想史研究会大会や、逆井先生とお会いできることを大変楽しみにしていたことが思い出される。清水氏が亡くなったとき、逆井先生からは大変心のこもった追悼のお手紙を頂戴した…。

先生からは、拙著刊行の度に、大変丁寧なご批評を頂戴した。最後に頂戴した二〇〇八

年のお葉書には、「入退院のくりかえしで充分本をよむ時間がとれませんが、何とかがんばりたいと思います」とあり、大変恐縮したことが思い出される。また一人、大きな影響を受けた先生がいらっしゃらなくなり、果たして先学の気概を、きちんと継承できているのか、今の日本を見るにつけても、暗然たる思いの日々が続いている。

最後に、逆井先生のご論考の中で、私がかつて何度も口ずさんだ一文を掲げ、その気概を継承することを霊前にお誓いして、拙い追悼文としたい。

「(山片蟠桃の) 経世論は、全体として『王道』の今日的再生の視点から、あらためて捉えられねばならない。…『王道』は蟠桃もいうとおり、それを希求し実現しようとたたかう人びとの運動のなかに、つねに今日的条件において再生しうるものなのである。彼の『王道』経世論は、それを待ち望んでいるとってよいのではなかろうか」(「山片蟠桃における秩序と市場」)。